

# 英・王室スキャンダル報道を生むもの

## メディア研究家・スパークス氏が講演



コリン・S・スパークス氏 ウェストミンスター大学講師、「メディア、カルチャー アンド ソサエティ」誌編集者。新聞や放送に関する論文や、ユネスコ（国連教育科学文化機関）報告書などを執筆。「ブリティッシュ・カウシル」（英国文化振興会）の要請で来日した。（写真は30日午後、東京・内幸町の日本新聞協会での講演で）

### 競争激しい大衆紙 □ 醜聞を喜ぶ読者

英国のメディア研究家、コリン・S・スパークス氏が来日し、三十日、東京・内幸町の日本新聞協会で「英皇太子、政治家そして新聞」と題して講演した。スパークス氏は、大衆紙によるチャールズ皇太子とダイアナ妃のプライバシーに立ち入った報道ぶりを紹介。度を越した報道が続いていることには、激しい競争状態に置かれている英国新聞界と、醜聞を喜ぶ読者の双方に責任があると指摘した。

#### 部数の内訳 大衆紙85%

スパークス氏は「英国の新聞は、こと王室のことならは、どのような個人的なことでも報道する」と話し、次のような例を挙げた。

①チャールズ皇太子と親しい友人の電話を不法な方法で傍受して、その通話内容をこと細かく掲載②それだけでは不公平だと、結婚前のダイアナ妃と、親しい男性との間の電話の内

容も報道③アンドルー王子の妻、セーラ妃の上半身裸の写真を掲載④ダイアナ妃がスポーツクラブで運動している姿を報道⑤ダイアナ妃が使う衣装代などを詳報

「このような報道が続くことに、日本の人は驚いていると聞いていますが、英国の人にとっても驚きなのです」。スパークス氏は、そのような状況が続く理由を解説した。スパークス氏が紹介した統計によると、英国の主要

な新聞十一紙の部数は、合計で千四百万部近くにはのぼるが、タイムズに代表される高級紙はうち一五%にすぎず、残る八五%はサンなどの大衆紙が占める。

高級紙の間でもタイムズとインディペンデント、大衆紙の間ではサンとミラーの間に激しい競争がある。大衆紙の経営は、決定的に部数に依存し、読者も、せん情的で、個人的で、できれば性にかかわる話題を好み、王室のスキャンダル

に飛びつく。高級紙も、大衆紙が報じたことを伝えるという形で報道する、という。

王室内部で リーク合戦 「王室のスキャンダルは昔からあった」と、スパークス氏は十九世紀のピクトリア女王時代の例を引く。

「王室の皇太子は、カード（トランプ）の不正で悪名が高く、人妻を誘惑したりしたことを歴史家が指摘しているが、それが当時報道されることはなく、むしろ、「長年の敵国であるフランスを訪問するとは何事か」という、将来の王としての立場で批評された。

しかし、英国の国勢は衰え、「大英帝国」の時代は終わる。サッチャー首相（当時）が「社会というものは、あるのは家族と個人のみである」と演説するほどになった。現在、英国国民にとってもっとも大切なものは家族であり、それを象徴するのが王室になった。とスパークス氏はいう。

「今の新聞は、保安官と撃ち合っ前に最後の酒を飲んでいようだ」英国で新聞業界を管轄する元国民伝統相のデービッド・メラー氏は、在任中こう語ったという。メラー氏自身も、女優との交際を新聞に報道されて辞任に追い込まれた。

「新聞を何とかしなくては」という法規制の話は八〇年代から議会や一般の人から起きはじめた。「新聞紙面から女性の裸を取り除く」という法案も提出されたが、通らなかった。（パレスII宮殿と皮肉っているという。また、スパークス氏は、「王室が罪のない被害者という見方はあてはまらない。王室の人たちは、メディア対策の専門家を雇って、チャールズ皇太子の話しはダイアナ妃のマスコミ対策家が漏らし、逆に、ダイアナ妃の衣装代などはチャールズ皇太子側の専門家がマスコミに流した。新聞記者がたたくさんの家を回って聞き込んでいっているわけではない」と指摘。「王室が互いに仲が良い場合はそれでいいが、いったん悪くなる」と説明した。

新聞界は、「新聞苦情処理委員会」(PCC)を作った。しかし、同委員会には、ダイアナ妃のスポーツクラブでの写真をサンデー・ミラーが掲載した際、それを止められなかった。しかも、写真は再び、系列のデーリー・ミラーに掲載された。この経緯の中で、マクレガー・PCC委員長が「広告主は、ミラーに広告を出すな」とテレビで演説する事態になった。

スパークス氏は「新聞に対して法的な規制を行うのは非常に危険だ」と思う。八五%の読者が大衆紙を読んでいる現状では、ジャーナリストを教育しても効果があげられるのは難しい。新聞オーナーの目がそっちに向かうのも無理がない。新聞が悪いのは読者も共犯だ」と述べた。

題字わきに大きく「10%」。安さを強調する英国紙



英高級紙安売り再燃



# ダイアナ騒動「熱い仲」も作られた!?

# 新聞写真修整は是か非か

「ダイアナ騒動」が再燃した英国で、コンピュータによる新聞写真の「修整」が議論を呼んでいる。元皇太子妃と新しい交際相手との仲を強調しようとした大衆紙が、写っている人物の顔の向きを変え、まるでキス前のように仕立てたからだ。コンピュータで思いのままに写真の操作ができるようになり、「写真はウソをつかない」という常識も英国では疑わしくなってきたようだ。

(ロンドン＝橋本 聡)

## 英国で論議呼ぶ

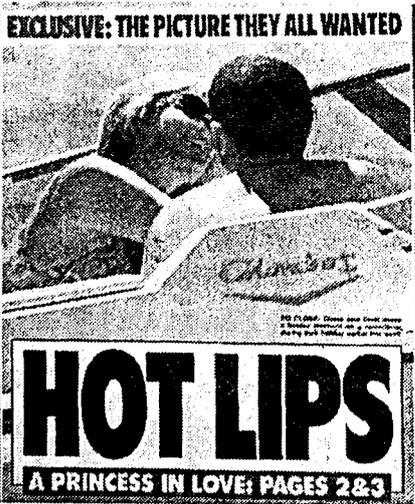
地中海に浮かぶヨット。1、ドレイ・アル・ファイのデッキで親しげに見つめ合う二人。九日付の大衆紙「Mirror」の一面写真を見た多くの読者は、「熱い唇」という大見出しにも引きずられ、ダイアナ元皇太子妃と新しい恋人と、翌日、ピープル紙が載せた写真(写真②)を見る

と、ファイエド氏の顔は右向き。ミラー紙はそれを左向きにしたうえ、背中につる頭の影の位置も、自然ならならぬよう移し替えていた。

映像加工用コンピュータソフトの仕様だった。いったんコンピュータに写真をとりこめば、自由自在に手を加えることができ、しかも、その仕上がり後、二人が抱き合っている

は、素人目には本物と同じかと思えないほど精巧だ。このソフトは約五百ポンド(約十万円)で市販され、ロンドンでは一般の写真店も、破損した記念写真の修復などに使っている。

ミラー紙は「ほんの少し動かしただけ」と改ざんを認め、自由自在に改ざんを認めた。しかし、紙面では何も釈明していない。その



写真① コンピューターで元皇太子妃の「恋人」の顔の向きを変えた写真を掲載したミラー紙

写真② ピープル紙が掲載した本物の写真では、ファイエド氏はそっぽを向いている

## コンピュータで自由自在

写真が報道され、デートも目撃されるなど「本物の仲」だから、というところから報道したように、ほんとは蔵相の右手の後ろに女性の頭が写っていた。

「髪の部分も少しいじって、たいした問題ではない」と話した。

写真をすっきりさせたが、主張するガーディアンと、写真がむたむたすメツナラ。程度の差はあるにせよ、コンピュータ操作が報道写真の現場に広がっていることが浮き彫りになった。

「写真幻論」の著作もある写真家・評論家の大島洋さんの話。写真はありのままを伝えるものと一般に思われてきたが、添えられる文章によって印象も意味も変わるし、レンズによって誇張されたり合成されたりした写真は、必ずしも正しい写真が報道され、デートも目撃されるなど「本物の仲」だから、というところから報道したように、ほんとは蔵相の右手の後ろに女性の頭が写っていた。

高級紙ガーディアンは、やはりコンピュータを操り、人影をきれいさっぱり消し去っていた。指摘を聞き取らなかった。

イギリスの新聞・出版業界は報道倫理綱領をもち、それに反する行為を戒め、自主規制機関もある。しかし、綱領を設けた当時、今回のようなケースは想定されていなかったという。英下院文化・メディア・スポーツ特別委員会のカウフマン委員長は「写真に手を加えたら、読者に知らせる義務がある」と、綱領の改正を唱えている。

写真③ 蔵相が持つかばんの後ろに女性の頭がのぞいていた(左)が、ガーディアン紙はこの人物を消去してしまった(右)。ミラー紙の紙面から

## 能力とモラル問われる

「写真幻論」の著作もある写真家・評論家の大島洋さんの話。写真はありのままを伝えるものと一般に思われてきたが、添えられる文章によって印象も意味も変わるし、レンズによって誇張されたり合成されたりした写真は、必ずしも正しい写真が報道され、デートも目撃されるなど「本物の仲」だから、というところから報道したように、ほんとは蔵相の右手の後ろに女性の頭が写っていた。

写真をすっきりさせたが、主張するガーディアンと、写真がむたむたすメツナラ。程度の差はあるにせよ、コンピュータ操作が報道写真の現場に広がっていることが浮き彫りになった。

イギリスの新聞・出版業界は報道倫理綱領をもち、それに反する行為を戒め、自主規制機関もある。しかし、綱領を設けた当時、今回のようなケースは想定されていなかったという。英下院文化・メディア・スポーツ特別委員会のカウフマン委員長は「写真に手を加えたら、読者に知らせる義務がある」と、綱領の改正を唱えている。

新聞で、このような修整写真が出現したことについて、驚きはしないが問題だと思ふ。ただ、背景を消してすっきりさせることは、顔写真などでも行われており、是非の線引きは難しい。私自身は写したくないノイズが入るのも写真の魅力だと感じている。写真に携わる人の能力とモラルがより問われていくだろう。

写真① コンピューターで元皇太子妃の「恋人」の顔の向きを変えた写真を掲載したミラー紙

写真② ピープル紙が掲載した本物の写真では、ファイエド氏はそっぽを向いている

# 地球年代記'97

050

宮田一雄

「ダイアナ」でも歴史上でかつてない現象が生じていました。メディアはいったいどこにあり、わたしは作りあげられたおとぎ話の主人公。沈むか、泳ぐかありませんでした」

マーティン「どうなさったのです」

ダイアナ「わたしは泳ぎました」(石井美樹子著「ダイアナ・メッセージ」から)

英国のダイアナ元皇太子妃は八月三十一日未明、パリで三十三歳の生涯を閉じた。彼女の死の原因になった交通事故についてはすでに多くが報じられているが、重傷を承知で書けば、ダイアナ元妃と恋人のドディ・アルファイド氏を乗せた車は「パパラッチ」と呼ばれるカメラマンの追跡を逃れようとして猛スピードを出していた。ただし、カメラマンの追跡が事故原因と直接、つながるのかわるかは、いまだに明らかではない。

## 20世紀特派員

■沈黙も可能

冒頭の会話は一九九五年十一月、ダイアナ妃が英BBCテレビのインタビューに応じた際のやりとりである。当時、彼女はチャールズ皇太子と別居中であり、離婚は時間の問題とされていた。英皇太子と結婚することによって「世界で最も多く写真を撮られ、最も話題にされる女性」となってしまったダイアナ・スペンサーは、その環境にどう適応しようとしたのか。インタビューのマーティン・バッキューア氏の質問にダイアナ妃は「わたしは泳ぎました」と答える。

その言葉通りに彼女はメディアの海を泳ぎ、そして沈んだ。死の間際まで「パパラッチ」に追われていたことは、彼女が「歴史上でかつてない現象」の渦中にいたことを何よりも雄弁に語っている。

しかし、ダイアナ元妃とメディアの関係を一方的な

# メディアの海を泳ぎ、沈んだ

ダイアナ現象



ダイアナ元妃の遺体の帰国を伝える9月1日付の英国の各紙 (AP)

被害者に加害者の構図で割り切ることはできない。英国のメディア研究家であるスコット・スミス博士は、故直後、スキャンダル報道にさらされた王室について「もつと沈黙することもできたのに、私生活をさらすことを選んだ。自己宣伝のためにメディアに出ることをいとわぬ意思を示して書いた以上、自分たちが書いてほしいことばかり報道するようメディアに期待するのは虫が良すぎる」と厳しい見解を示した。

ダイアナ元妃とチャールズ皇太子がともに自分の都合のいい主張を通すためにメディアを意図的に使い、それがスキャンダル報道を過熱させる結果にもなっていたからだ。

スペイクス氏が指摘するように、チャールズ皇太子とダイアナ元妃はもつと沈黙することもできた。英国社会の中で王室が果たす役割は「よき家庭のモデル」を示すことだといわれる。実際には昔から英王室は恋愛関係をめぐるあつれきに事欠かないのだが、「沈黙すること」でスキャンダルを回避し、よき家庭ぶりを国民に示してきた。

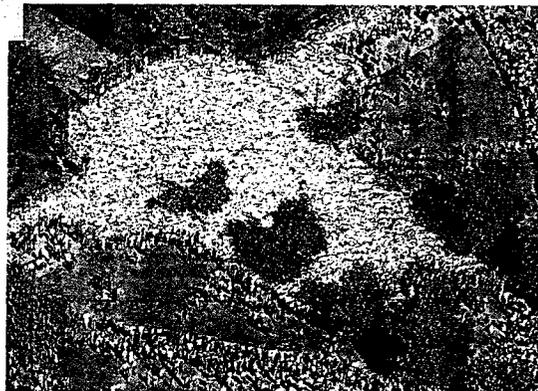
■王冠か恋か

大英帝国の絶頂期を築いたビクトリア時代は一九〇一年一月二十一日、ビクトリア女王の死によって終わりを告げた。二十世紀は女王の長男エドワード七世の即位によって幕を開ける。

神奈川大学の石井美樹子教授の近著「ダイアナ・メッセージ」によると、エド

ワード七世は現在のチャールズ皇太子の恋人カミラ・パーカー・ボウルズさんの祖母にあたるアリス・ケッセル夫人をはじめ多数の恋人がいた。フランス女優サラ・ベルナルドもその一人で、エドワード七世は彼女の舞台に死体の役で出演したりもしている。アレグザンダー王妃は国王のそうした行状に耐え、夫の臨終にはアリス・ケッセル夫人を死の床に招く。

エドワード八世は一九三六年、離婚歴のある米国のシンプレソン夫人と結婚するために「王冠か恋か」の選択を迫られて王位を去る。つまり、二十世紀初頭の王妃は夫の淫気じつと耐え、三〇年代になっても王妃が離婚歴のある女性と結婚するには王位を棒に振らなければならなかった。



ケンジントン宮殿前の花束=9月4日 (AP)

■女性の理想

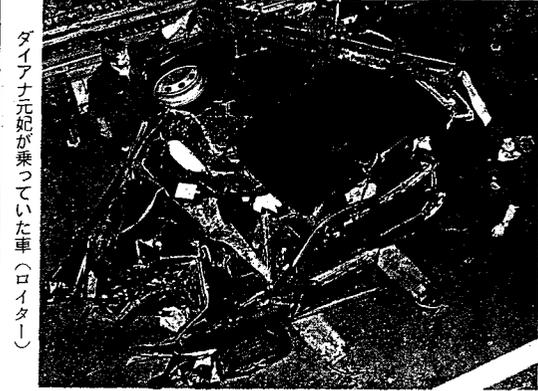
ダイアナ元妃が住んでいたケンジントン宮殿など各宮殿の前に供えられた花束は推定六千万本に達し、ロック歌手エルトン・ジョンが葬儀で歌った「キャンダール・イン・ザ・ウインド」はシングル盤としては過去にないという。

ダイアナ元妃は離婚して二人の子を育て、「良き母」であると同時に恋も、社会活動にも「仕事」として熱意を示す。そこに女性解放の時代でもあった二十世紀に女性たちがたどりついた一つの理想型を見ようとする人もいる。しかし、それだけでは説明がつかない。

また、メディアによって情報を共有する大衆の大きな感情の揺れを危うくするものもある。しかし、その大衆という存在そのものが、大衆の一部である私たちにもつかみきれない。

二十世紀とはどんな時代なのか。来年は、ダイアナ現象の先祖ともいえるエドワード八世とシンプレソン夫人の「王冠をかけた恋」にもう一度、光をあてることから、歴史という現場取材する二十世紀特派員の作業を再開することにした。(外信部長)

「地球年代記'97」は本日から終わり。一月五日から新シリーズ「恋する王室」が始まります。



ダイアナ元妃が乗っていた車 (ロイター)



今年6月18日、ニューヨークでマザー・テレサ(左)と短い会話を交わすダイアナ元妃 (ロイター)

級の価値観が色濃く反映され、社会を構成する単位としての家庭の存在が重視されるようになった。この結果、よき家庭生活が社会の理想とされ、王室には幸福な家庭の模範となることが求められた。その一方で、家庭の崩壊につながるような行為に対しては宗教的、道徳的抑圧が強まり、このことが世間体や体面を取りつこう風潮を広げた。

▼豆事典

▼パパラッチ 有名人を追いかけてまわすカメラマン。イタリアのフェデリコ・フェリーニ監督の映画「甘い生活」に登場する盗撮専門のカメラマンの名前「パパラッチ」になって一般名詞化したといわれ、ダイアナ元妃の事故死で有名になった。

▼ビクトリア時代 1837年から1901年までの英国のビクトリア女王の治世。英国は世界経済の覇者として黄金時代を迎えた。ビクトリアニズムと呼ばれるこの時代の文化や生活、考え方には、勤勉、自主独立など産業革命による工業化と都市化を背景に台頭した中流階

▼エドワード7世 (1841-1910年) 英国王。ビクトリア女王のもとでは放とうを理由に国務から遠ざけられていたが、国民には人気があった。ビクトリア女王の治世の間、長く皇太子の地位にあり、即位後はわずか9年で死去した。